家庭において引き継がれるべきもの

女性論・身体論の観点から

日本家庭教育学会
会長　中田 雅敏

○ 第32回大会を平成29年8月19日（土）、貞静学園短期大学にて開催した。
○ 大会テーマは、
「家庭において引き継がれるべきものー女性論・身体論の観点からー」。
家庭・家族・家庭教育において個々人が、また社会が引き継いでいくべきものとは何なのかを、「女性論」・「身体論」の観点から問い直す機会とした。
○ 午前の部では、中田会長による開会式の後、19名の研究者・実践者による個人研究発表を、5会場に分けて行った。
○ 午後の部では、大会の主題に基づき、この問題について長年、重要な意見を発信してきた三砂ちづる氏（津田塾大学教授）を講師に迎えて、講演が行われた。
○ 主題に関して、奥明子副会長（貞静学園短期大学学長）の司会で、
江田英里香氏（神戸学院大学講師）、
松本亜紀氏（倫理文化研究センター専門研究員）のパネラーから、
それぞれの専門分野による意見の披瀝と、参加者との質疑・討議が行われた。
○ 参加者は、午前・午後の部あわせて323名であった。

1．平成29年度の主な活動概況

本学会は、1986年の設立以来、家庭教育に関する学問的研究を促進し、実生活における家庭教育の普及や支援者養成を進めている。

平成29年度の主な活動は、

○　第32回大会の開催

○　『家庭教育研究』23号の発行
（30年3月、論文５編を掲載）

○　『家庭フォーラム』28号の発行
（29年11月、特集：家庭教育で引き継がれるもの）

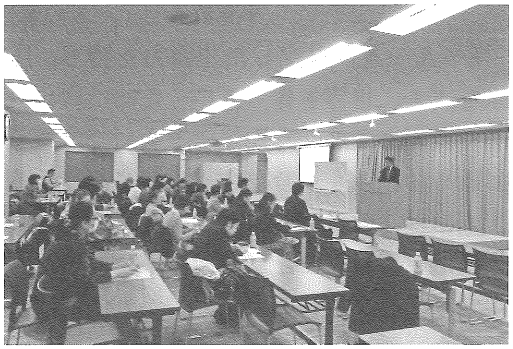
○　会報99号（平成29年4月）、100号（29年10月）発行

○　家庭教育学構築のためのワーキンググループの研究会（年３回）

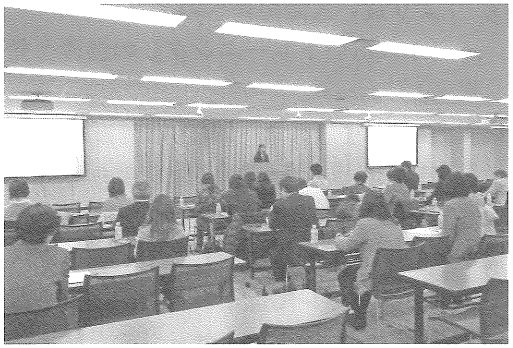
- 第１回「添い寝が対人依存ー依存容認に及ぼす影響」（吉田美奈氏、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）
- 第２回「日韓いじめ対策の比較」（西中研二氏、常任理事）
- 第３回「教育政策論からみた家庭教育学の領域」（西中研二氏、常任理事）

○　家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会［平成30年2月、講演「子育ての極意」（丸山敏秋副会長・倫理研究所理事長）および活動報告］

○　常任理事・幹事会（４回）および総会



◆　家庭教育師：アドバイザー交流会講演



◆　家庭教育師の活動報告

2．第32回大会報告

(1)　「家庭教育と幸福感」

（中田雅敏会長）

〔家庭教育は生き甲斐と幸福感を得ることにある。事象的には様々な、社会的にも個人的にも解決し難い問題がある。それ故に学問として体系づけることは極めて困難さを伴う。

そうした中で「学校教育に幸福学」を活かすことを試みている学者もおられる。幸福学研究に取り込み、学校の授業で教えることを提唱されている。これも家庭教育に含まれる。

人間は生きてゆく上で明日への活力を生むための喜びが得られなければ、生きてゆく価値を見出すことはできない。「いじめ」を苦にした青少年の自殺を含め、今や日本では毎年三万人を超す自殺者がいる。何故自ら自分の命を絶ってしまうのであろう。生きているという喜び、生き甲斐の喪失、幸福感が持てないからであろう。

生き甲斐とはどんな場合に生まれてくるのか、また幸福とはどういう場合に見出すことができる感情なのか、そして充実した生活を送り、人間性を高めるためにはどうすればよいのであろう。学校でも家庭でも社会でも、生き甲斐と幸福について教えてはくれない。

私達は実は幸福の正体について誰もが感じ取っているはずである。しかし、それは千差万別であって無数にあり、他の人と比較することができるものではない。「幸福とは常に一瞬の感覚である。今幸せと思うことが明日の不幸の種になっているかもしれない」と常住坐臥思っていることが大事なことである。

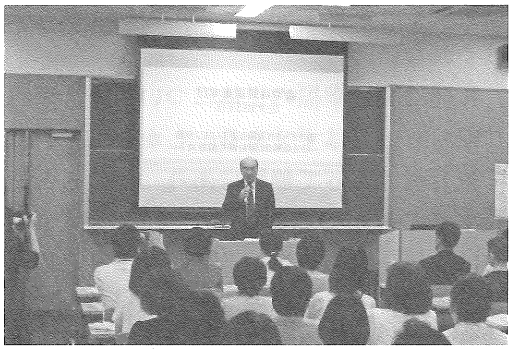
人間の創造行為には多かれ少なかれ苦しみを伴う。しばしば幸福感は不幸感と軌を一にしている。また「人間が本当に欲しいと思うのは幸福か自由なのか」という疑問もある。つまり幸福、あるいは幸福感は一人ひとりで異なるもので、主観的であると同時に、人間相互における相対的なものである。またそのひと個人、自らについても様々な状況の変化により変ってゆくものでもある。

幸福の正体とはどんなものであれ、積極的な生き方をし、生き甲斐を見出していこうとする生活も、何かの目標を目指して精進する生き方も、つまりは幸福追求の現れである。

毎日を充実した生活を送り、たとえ苦しくとも成し遂げようと努力を惜しまない中

に幸福というものがあるのかもしれない。

そうしたことを手掛かりとして、自分がいま、どんなものを幸福と考えているかを確かめ、その幸福を手に入れるために、他人を羨まず、他人を損なわず、社会を混乱させず、家庭を壊さず、幸福を手に入れるために、いま何をしているか、どんな努力をしているか、自分を顧みてみることが家庭教育なのである。いま自分は幸福である、と誰もが思えるようにすることが家庭教育なのである。〕　（会報100号より）



◆　開会式での挨拶：中田会長

(2)　個人研究発表

①「働く親の子育て支援と心の支援の必要性－未来を担う子どもの幸せを願って－」

荒川由紀子（スコーレ家庭教育振興協会）

〔現在、日本の約８割の家庭が共働きであり、その割合は年々増えている。国の「一億総活躍社会」の現実を目指して女性の活躍が期待されているが、それに伴い、子どもの問題行動、児童相談所への相談件数が増えている現状がある。その中で親自身の生活が子供に与える影響を考えてみる。〕

②「子どもの発達と学習意欲における家庭教育の役割－子どもの学習意欲を妨害する親の行動－」

平林直人（子どもの家）

〔一人一人が自立した想像力を持ち、国家を支え、世界を作っていくためには、計画や法規をミスなく実施する人材ではなく、計画や仕組みを作り出す人材が必要になる。家庭おける教育では、良き社会人としての人格形成を行うことが必要であり、子どもの発達や心をもっとよく、しかも個別に理解しなければならないと考える。〕

③「より良い人間関係へのアプローチ－『ふれあいトレーニング』の意義と効果－」

藤田郁子（スコーレ家庭教育振興協会）

〔女性が子どもを産めば母になれる時代は過去となり、現実は自分の子どもへの愛情不足を嘆き、子どもに対して不安に陥っている。スコーレではこれらの問題点を踏まえ、体操やゲーム、マッサージなどによって、身体と身体を触れ合うことで、人肌の温かさを感じ、心身ともに癒され、共感力を高める「ふれあいトレーニング」を開発した。

このトレーニングの意義と必要性について説明する。〕

④「発達障害の子どもを持つ父親への支援－学びを通しての変化を考察する－」

池田信子（家庭教育師）

〔発達障害者支援制度（2005年4月1日）、発達障害者支援法一部改正（2016年5月）により、権利侵害を受けずに社会参加でき、幸せに暮らしていけるよう法律上は保証された。しかし、実際は司法、教育、福祉の分野で様々な差別が存在している。

今回は発達障害をもつ子どもの家族支援として「父親への発達支援家庭教育」を行った結果からの考察を発表する。〕

⑤ 「家庭と地域が育む子どもの自主性－地域多世代懇談会に参画する中高生の自主性に視点をおいて－」

中島佳世 （家庭教育支援協会）

〔本発表は、国連の「児童の権利に関する条約」とりわけ「参加する権利」の実現を願い、それを子どもの「自主性」の視点から考察する。〕

⑥ 「中国の新人類『８０後』について－上海を中心とした中国の家庭教育－」

王鑫（新潟県立新井高等学校）

〔中国において新人類と呼ばれている1980年代の生まれの若い世代に注目し、彼らの性向と家庭教育との関係を考察する。〕

⑦ 「久松松平家における武芸教育に関する一考察」

菊本智之（常葉大学）

〔本研究は、「寛政の改革」を行った白河藩主・松平定信に注目し、久松松平家で行われた武芸教育や「家」としての継承していったものなどについて、思想的な影響などと共に考察するものである。当時の社会的リーダを養成するための方法論を打ち出した松平定信の家庭における武芸教育の在り方は、現代社会における家庭教育の在り方を考えるうえで、参考になる部分があることを論じた。〕

⑧ 「『葉隠』にみる家庭教育」

西中研二（筑波大学）

〔『葉隠』といえば武士の死生観や忠孝論が有名であるが、実際には「人事管理論」や「家庭教育論」にも多くの項目を割いている。本発表は家庭教育論を、対人関係論、子育て論、道徳教育論に分類し、当時の武士社会における家庭教育の実体を垣間見ようとするものである。〕

⑨ 「親子遊びの中での母親の関わり行動の変化－子育て支援ルームの親子遊びの記録の分析から－」

高畑芳美（兵庫教育大学大学院）

〔本研究は、乳児期の子どもに対する母親の遊びへの関りが、子育て支援ルームの場においてどのように変化するかを明らかにするものである。この時期の親子の関りにとって重要な支援とは何かを考えてみたい。〕

⑩ 「子育て支援に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴」

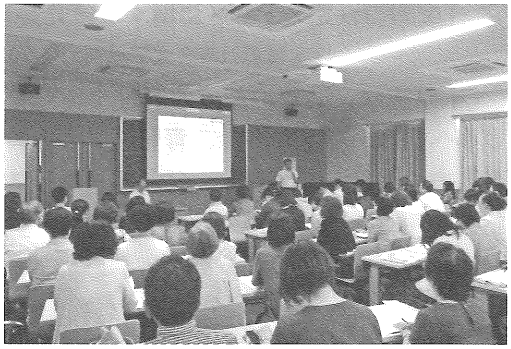
岡村幸代（兵庫教育大学大学院）他

〔本研究は、地域での子育て支援講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴について、テキストマイニングを援用し分析したものである。頻出語の分析、階層的クラスタ分析、親性尺度の構成概念による頻出語の分類などを行った。〕

⑪ 「子育て支援員が抱く保育観について－子育て支援員研修受講者へのアンケート調査から－」

上岡紀美（仙台白百合女子大学）

〔本研究では、子育て支援員研修受講者が抱く保育観を取り上げ、支援員の質担保における課題を探ったものである。保育観を自由記述により問うた結果、「他者に優



◆ 個人研究発表の様子

しく思いやりがある子ども」「自分を大切にする子ども」といった心理面に目を向ける一方、子どもの育ちに関わるうえで具体性に欠ける傾向が見られた。〕

⑫「子育て支援を促す保育者支援プログラムの開発」

大森弘子（兵庫教育大学大学院）

〔本研究は、リフレクション（振り返り深く考え直すこと）及び認知行動論的技法に基づき、子育て中の家庭の支援を担う保育者への支援プログラムの開発を試みたものである。現職保育者を対象に、家庭を支援する上で必要となる「保育者への役割期待の理解」や「保育者効力感の向上」を目指した。〕

⑬「虐待防止のための妊娠期からの啓発について－児童虐待を起こさない・起こさせないために－」

高祖常子（認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク理事）

〔子どもへの対応の仕方がわからず、「しつけなければ」という思いを強く持ち、それが行き過ぎて暴力になってしまうことがある。そのような情報を妊娠中から発信していくことにより、虐待増加の歯止めにもなると期待している。〕

⑭「父親の育児ストレスに関する研究」

鈴木順子（修文大学短期大学部）

〔本研究は、父親の基本的属性や育児や家事へのストレスの有無、育児や家事への考え方を関連して検討し、父親のストレス状況を明確にいたうえで、ストレス軽減の一助を考察するものである。〕

⑮「民間活動による家庭教育の支援－学生によるオレンジリボン活動の実践報告を通して－」

笹尾雅美（貞静学園短期大学）

〔学生によるオレンジリボン活動を分析した結果として、1）参加学生は、保育者の資質が向上し、自分の子育てについて考える機会になる、2）地域社会の子ども虐待防止の啓発活動に貢献する、3）手軽且つ経済的負担が少ないことから、友人、家族、地域、職場へと広がることが明らかになった。〕

⑯「関りの中で自己尊重感が育つ－デンマークの保育実践に学ぶ－」

大橋喜美子（大阪成蹊大学）

〔本研究では、デンマークの保育園での砂場遊びを観察記録して、そのデータから自己尊重観の育ちに関する部分を分析の対象とし、表現、主張を、共感、評価、配慮などをカテゴリー化して分析を行った。〕

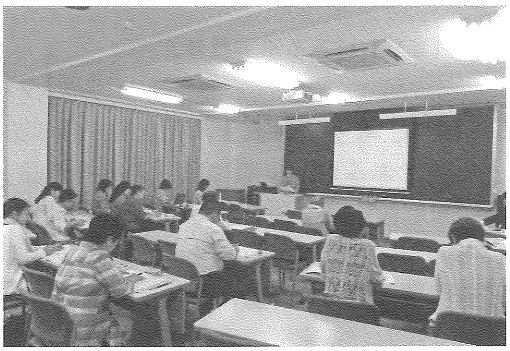
⑰「読み聞かせボランティアへの継続的な参加が読み手の成長に与える影響」

勝眞 瞳（早稲田大学人間科学部）他

⑱「絵本の読み聞かせ場面における親と子の情緒的交流」

黒田みゆき（鳴門教育大学大学院）

〔本研究では、絵本の聞き手に焦点を合わせて、絵本の読み聞かせ読み手と聞き手



◆ 個人研究発表の様子

の関係性の背景にあるものを明らかにしたい。〕

⑲ 「子どもの自尊感情尺度作成の試み－選択理論心理学をベースとして－」

薬師寺明日香（鳴門教育大学大学院）

(3) 全 体 会

① 講演「家庭において引き継がれるべきもの－女性論・身体論の観点から」

三砂ちづる 氏

（津田塾大学教授）

《今年は、津田塾大学国際関係学科の教授であり、国際保健、母子保健を専門に国際的に活動されている三砂ちづる氏による講演だった。冒頭では、世界で最も有名な日本人女性の例として「オノ・ヨーコ」の話題から始まり、そこから自身の家族や家庭論について話された。

子育ては、文化、地域、家庭の中で直接影響を受けているものであり、その中で親しい人への影響を否応なしに受け継いでいる。親や祖父母が抱えていた問題や叶えられなかったことを子どもは引き継いでいるという。

また三砂氏は、10年間のブラジル生活で、ブラジルという国は、「家族」に対する想いが日本とは異なることを知ったという。「家族」と認識した人を支えることが当たり前であり、それは「結婚」「離婚」という形式にとらわれず、家族の関係性は変わることないということだ。家族は増え続け、支え合うということを知り、家族の在り方の素晴らしさを考えさせられたという。

今回の講演テーマの「鍵」となった「家庭とは無限の受容装置である」という言葉だ。家族とは、限りなく受け入れられる場所であり、人間が社会を作るにあたって必要だから作られたのが家族である。

そして、女性がどうあるべきかが社会の要になっている。女性の身体は、無限の受容装置になるにあたり、喜びを感じるよう出来ている。それは人間として倫理に基づいたことは喜ばしいことであり、絶対的に受容を助けるためにそのきっかけが女性の身体に喜びを感じるようになっている。

だからこそ女性が女性の身体性を取り戻すことが大切だと説いた。様々な経験と研究から発せられた言葉は、参加者に強いメッセージとして心に響いたと思われる。》

② パネルディスカッション

《講演後のパネルディスカッションでは、神戸学院大学の江田英里香氏と、倫理文化研究センター専門研究員の松本亜紀氏が加わり、それぞれ自身の育児経験、活動経験などを話された。参加者は女性が多いこともあり、共感する話に大いに盛り上がり、女性パワーに満ち溢れた一日となった。》

（会報100号より要約）

◆ パネルディスカッションの様子

文責：嚴錫仁

（日本家庭教育学会事務局長）